

かしま再発見～古枝編～ ギャラリートーク（その一）

「古枝の歴史と文化財」

日時：平成 27 年 10 月 10 日（土）10 時～

場所：鹿島市林業体育館（古枝）

講師：鹿島市生涯学習課 江島美央さん

皆さん。おはようございます。

今日は、「古枝の歴史と文化財」ということで、古枝地区のお話をさせていただきます。

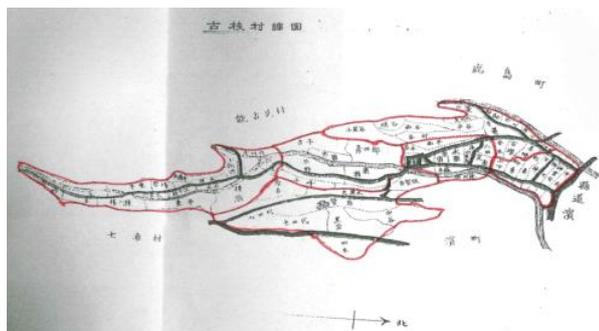
まず、文化の伝承の仕方からお話しします。文化というのは、池に石をポーンと投げると輪が広がっていくように、文化もそのように広がっていきます。だいたい京都の辺で文化は発祥するのですが、その文化が広がっていった、いまだに九州とか東北には残っていると考えてください。一番わかりやすいのが、縄文時代の犬は北海道犬と琉球犬と骨格が一緒です。同心円状の円の一番外側にあるということです。

なぜそういう話をするかというと、鹿島が民俗学の宝庫だからです。遅れているとかそういう意味ではなくて、古き良きものが残っているということです。たとえば、皆さんが「もやい」「おもやいしなさい」ということを言われますね。私はそれを古枝で聞いて心に残っているのですが、これは鎌倉時代の言葉です。鎌倉時代の「結（ゆい）」と「もやい」、これは共同作業をするという意味です。要するに、田植えなど自分の田でないところを共同で作業をする、そういうことを表わす言葉が今も鹿島では使われているということになります。

皆さんは、「古賀内」とか共同体の名前を大事にされていると思うのですが、それは江戸時代、古くは鎌倉時代からの風習です。だから、そういう馴染みの言葉が消えていくのは寂しいですね。そういう言葉をお子さんたちにも伝えていただきたいなと思います。

では早速、本題に入ります。

まず、古枝の地名についてですが、地名というのは先人たちが伝えた記号、単位です。これが一番言われたのが、東日本大震災が起こった時でした。昔の津波があった所には津波に関係した地名がついてい



古枝村縮図（古枝村小志）

るので、地名には意味があると言われたのです。それでは古枝とはどういう意味かというと、古枝川は観潮河川、要は潮の満引きによって増えたり減ったりする河川で、かつては字岩本付近まで船が遡っていました。鎌倉時代にここが全部自然陸化と干拓によって田畑が開かれたから、「古い江」「かつての江」に田ができたということにちなんで、古江田という地名が起りました。これが古枝に伝わる地名の由来です。



江島美央さん

昭和3年発行の『古枝村小志』に古枝村の縮図がありますが、これが一番地形がわかりやすいと思います。大村方辺りは、寺角とか松角とか「角」という地名が多いですね。きれいに、角、角、となってます。要するにここが干拓された、整備された土地ということなのです。大村方はこのように、区画された場所だということがわかります。また、「園」が付く所は平安時代に荘園があった所です。「谷」はそのままで、山の方で「平」となると、そこは開拓地で、木を切って開けたから「平」です。「川内」となると谷間だなど、こういうふうに、等高線がなくても、地名に詳しくなると漢字を見ただけでここはどういう土地だということが分かるようになります。それがなぜわかるかというと、このように昔の小字名が古枝には残っているからです。これを鹿島地区でやれと言われると至難の業ですね、もう変わってしまったから。だから、この昭和3年の地図と今も字の区画は全然変わっていないので、どういう土地だったのかということが、きちんとわかります。昭和3年から変わっていない、それだけ大事にされているということですね。

それでは、各地区の地名と歴史についてお話します。

まず、大村方です。ここは大村氏ゆかりの地だから大村方といいます。



大村方（古枝村小志）

小字名が、寺角、神宮司角、柚木角、天神、松角、柳角、山下角となっています。先ほど言ったように、ちゃんと区画がされているので、ほとんどの地名に角という字がついています。さらに地名から、ここにはお寺があった、神宮、神社があった、天神さまがあったとわかります。また、目印に松を植えていたから松角、柳だから柳角、山の下だと山下角となっています。

歴史としては、まず、囲碁の名手である寛蓮が藤津郡大村の人と明記されています。これが、長崎の大村市なのか鹿島の大村方なのかという論争が昔あったのですが、長崎の大村市が引かれたので、鹿島の大村方の人となりました。寛蓮さんは橘家なので、京都から荘園の管理でこちらに来ていた貴族の子として生まれたと思われます。さっきも言ったとおり、大村方はきちんと区画されていたり、近くに堂園とか荘園の跡があったりするので、こちら一帯も橘氏の荘園だったのではないかと推測されます。

時代が少し下って、鎌倉時代頃には大村氏が藤津地方の代官として居住した場所です。寺角にある若宮神社は、千葉氏との戦いで討ち死にした大村家宥を祀ってあります。宥馬は大村氏のところに後から入った形になっているので、大村氏の無念を祀ったのではないかと思います。

浜に知恩寺というのがありますが、最初、鮎越の古賀坂にあって、次に大村方の寺角に建てられました。だからこの小字名が寺角だと思われます。

次は久保山ですが、実はここは古墳地帯でした。残念ながら残ってないですが。

小字名が、一本木、真崎、湊上、井上とあり、こちら辺が川とか水とかの近くだということがわかります。若宮は何か屋敷跡があったのでしょう。百塚は、古墳がある所には大概「塚」が付きますから、久保山にはたくさん古墳があったのだらうと思います。

また、「^{かき}籠」というのは干拓地です。籠も搦も工法の違いですが、だいたい、鹿島藩が干拓したところは「籠」と言います。本藩が干拓したところは「^{からみ}搦」なので、七浦はほとんど搦です。



久保山（古枝村小志）

歴史ですが、多良岳から舌状に丘陵地があり、その先が久保山で、多くの古墳が存在していました。普明寺の中にあつた箱式石棺と、その西南にあつた巨石積みの横穴式石室墳など、これは古墳時代の末期のものなので、5世紀くらいです。中から鉄の刀とか種々の副葬品が出ており、そういう記録が残っているということは盗掘にもあつていないということになりますが、残念ながら破壊されています。でも、古墳時代には久保山が中心となつていたということが言えると思います。

久保山には、鹿島鍋島家の菩提寺である普明寺があり、また明治9年から昭和18年までは窯業の地として知られていました。他に遺跡と言えば、浜川沿いの小学校の周りにもあります。遺跡があるということは地盤が確かだということにもなります。

普明寺は鹿島鍋島家3代藩主の長男が建てたお寺です。この中にあつた高麗仏は、今は佐賀県立博物館に寄託されていて県の重要文化財になっています。この前まで韓国の美術展に呼ばれて行っていました。普明寺は寺域も含めて全部市の重要文化財になっています。

次は下古枝です。初めに話した古枝の地名の由来の字名がある地域です。



下古枝（古枝村小志）

小字名に定座とありますが、「座」というのは組合みたいなものです。例えば、銀座は銀貨を作る組合、銅座は銅貨を作る組合です。古枝にも「座」があつたのだと思います。通山は開拓地で、永園、堂園は平安時代の荘園の跡です。「園」とつく所はだいたいそうです。だから、先ほどの地図で見ると、開墾されたようにきれいに四角になっています。岩本は古枝の地名由来の所です。西平は開墾・開拓した所だと思います。

歴史としては、最初にお話したように、岩本まで船が遡ってきたので、昔の港だから古江田（古枝）という地名由来となっています。堂園にある光明院は1600年創建。結構古いお寺ですね。そして、古枝村は溜池を利用していましたが、この地区の通山溜池は1770年に造られたものです。今も農業用水として使われているそうです。その横に、天満宮があり、文字がちょっと読めなかったのですが、多分天神様か水神様が祀られていると思います。これが1770年代に建つたものであれば、今から250~300年くらい経っているわけですが、ちゃんとチャッカマンが置かれていて、今でも皆さんお参りをされていることがわかります。良い石碑だなあと感じました。

次は上古枝。上古枝は祐徳稲荷神社から上の方になりますが、源為朝のゆかりの地です。

小字名は、小峰、平野、広瀬、奥園とありますが、奥園は荘園ですね。下古枝に堂園という荘園がありましたが、堂園の奥にあるから、奥園です。彦四郎は、わかりません。鹿島では珍しいですね、人の名前が入っているのは。もし知っている人がいたら教えてください。



上古枝（古枝村小志）

歴史は、まず 1144 年、鎌倉幕府は 1192 年ですから、その 50 年くらい前に、山祇神社が昔の神社の所に建てられました。1687 年は萬子姫が、次男坊が死んでしまったため祐徳院(寺)に隠居した年で、この時京都の稲荷神を勧請して、祐徳稲荷神社となりました。祐徳稲荷神社の命婦社は県の重要文化財です。

ここで、源為朝について少しお話します。平家物語より少し前の話ですが、頼朝のお父さんの弟で、この人は八男坊なので、鎮西八郎為朝といいました。為朝はすごい武将で、保元の乱で負けた時に、九州に行って、自分は九州を平定するんだと言って、鎮西、西を治める、鎮西八郎と名乗って好き勝手します。その伝説が山祇神社に残っています。為朝が山祇神社の所に城を構えていた時に、庭を見ていたら子どもが来て、大の方をしようとした。それで頭にきて、矢を投げた。為朝は弓の名人ですので、当たったら子供は死んでしまうのですが、投げたら子供がスポンと取って投げ返した。それが城の柱にパーンと当たってクワッと振動したので、こりゃいかん、これは普通の子供ではない、神様に違いないと言って逃げていったという伝説が残っています。この城が手突城です。なので、為朝の伝説の、矢が当たったとか、矢を通したとか、的にしたとかいう伝説の跡が古枝には多いのです。佐賀県にこの為朝伝説が残っているのは、黒髪と鹿島だけではないかと思えます。

鎮西八郎は、2m10 cmの大男で、左腕が右腕より 12 cm長かったそうです。何故かという、弓を引くから、こっちが長いわけです。昔のスーパーヒーローです。

次は鮎越です。



鮎越（古枝村小志）

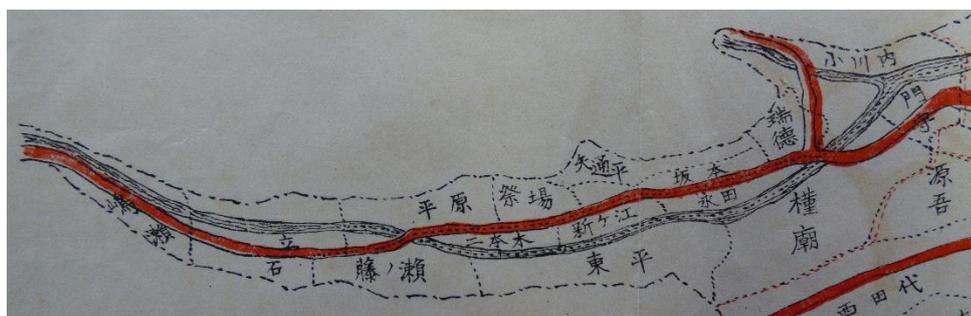
小字名では、古賀坂、これは手突城関係の名前で、城の坂があったから古賀坂というのだと思います。菅原というのは、萬子姫の長男の文丸が 10 歳で亡くなった時に、片時も離さずに持っていた菅原道真像が鮎越天満宮に祀られているので、その関係で菅原が地名に使われていると思われま。

歴史ですが、大村方出身の聖達上人という、すごく有名な浄土宗のお坊さんが、知恩寺を 1259 年に最初に古賀坂に建てて、次に寺角に建てましたが、その古賀坂ですね。これは鮎越にあります。そして、さっき小字名のところでお話ししましたが、萬子姫の長子文丸が 1673 年に 10 歳で死んでしまい、そ

の人が片時も離さずにとっていた菅原道真公の木像が1687年に天満宮に安置されたという歴史があります。

次は中尾です。平家の隠れ里で、平家一族に味方した尾崎という人がいたと歴史書に書いてあります。

小字名で今までと違うところは、門守、門を守るとか、槿廟とか、瑞徳は侍屋敷みたいな名前の小字名がありますね、矢通平は矢がついているので為朝伝説が残るところです。それから祭場、ここら辺が京都の落人がつけたのだろうなという地名です。



中尾（古枝村小志）

ここにも朝顔姫の伝説というのがあるのですが、朝顔姫が何者なのかはよくわかりません。もともとは尾崎という一族が京都の山城にいて、屋島の戦いと壇ノ浦の戦いで平家に味方するのですが、

結局負けてしまって、尾崎一族は山口に行ったのと中尾に隠れた人がいて、もともと京都で天神を崇拝していましたから、天神を勧請して天神さんとなりました。祭場というのが、そういう祭事をしていたところではないかと思えます。

歴史は、いまお話しした尾崎一族が、壇ノ浦の合戦後この地に隠れ住み、京都で崇敬していた北野天神を祀ったことと、槿廟にある中尾天満宮に「平直家」の墨書名がある神像がありますが、これは能古見の本城の原城の城主の原直家ではないかと考えられています。その原直家の次男が、雪舟派を継いで国の重要文化財となった水墨画をたくさん描いている雲谷等顔うんらくとうがんです。

あともう一人、この中尾出身で尾崎天風という方がいます。尾崎天風は、浜駅を造ったときに尽力された方で、北海道の北見市に行って、北海道を開墾するのに尽力しました。以前、北見市から問合せがあって、尾崎天風の資料を送ったのですが、北見市から何故こんなすごい人をちゃんと顕彰しないのかと怒られたことがありました。尾崎天風は、開墾ですごく尽力して、北見市では偉人の1人ですが、鹿島ではまだ知られていません。そのうちに中尾の方と一緒に尾崎天風のことをやりたいと思います。

次は奥山です。「とんのみぞ」の取水口があるところです。

小字名では、瀬戸は川の近くかな、高野平は高い所に開けた所があるのかな、河内も川に関係しており、なんとなく高いところかなということがわかります。

歴史は、もともと本藩領でしたので、今でも大字音成に属します。とんのみぞの取水口があり、この水道は現役で活躍中です。明治29年から昭和47年まで奥山分校がありました。奥山の天満宮には、山神様があって、その隣に八大竜王という水の神様がいます。山と水が一緒にある良い神社だなと思って見てきました。



嶽水道取水口（奥山）

次が竹ノ木庭。飛行機の墜落事故の現場になった所ですね。

小字名に、祭徳とありますが、この地名は気になりますね。矢通山は、為朝と関係のある所です。

歴史は、竹ノ木庭も本藩領だったから今でも音成に属しています。為朝伝説も残っています。



後藤勇吉慰霊碑(竹ノ木庭)

また、昭和3年に飛行機墜落事故が起きました。たまたま私が宮崎のテレビを見ていた時に、後藤勇吉の話がドキュメントで放映されていました。そして最後は、佐賀県の多良岳で亡くなりました、地元の竹ノ木庭の人たちが助けるために尽力してくれましたという話がありました。もともと後藤勇吉という人は、日本一周飛行とか、日本初ということを一ぱい成し遂げた人で、すごく有能なパイロットだったのですが、太平洋横断無着陸飛行の計画をしていて、その練習中に竹ノ木庭に突っ込んで死んでしまったと言われています。でもこの時、後藤勇吉は操縦していなかったのです。違う人が操縦していて、操縦していた人ともう一人の人は助かって、後藤だけが逃げ遅れて亡くなってしまいました。後藤勇吉が生きていたら、この人が世界で初めての太平洋横断となっただろうと言われています。

最後は平仁田開拓です。ここが鹿島最古の住宅地となります。

小字名は二つしかないですが、歴史は、なんととっても儀助平洞穴です。要するに、ここに人が住んでいて、しかも鹿島で一番古い遺跡だから、ここが鹿島最古の住宅地になります。縄文時代全般にわたる土器や石器が出土しました。縄文時代の後期だけではなくて、前期、中期、後期の土器が見つかります。それまで鹿島には縄文遺跡はあっても土器は見つかったことがないから、当時の定説をグワーンとひっくり返すくらいの大発見で、しかも中学生による発見でした。これが遺跡(写真)、縄文人だから、まだ狩猟民族ですので、こういう穴倉に、毛皮を巻きつけたような服を着て生活をしていました。ここに、前期、中期、後期の土器があったということは、ずーっとここに人が住んでいたということですよね。この穴に住んでいた、その遺跡です。



儀助平洞穴(平仁田開拓)



絵図の説明風景

それでは、今日初公開の明治18年の絵図を広げたいと思います。

これが、今年教育委員会に寄贈があった明治18年の絵図です。鹿島一帯からは明治9年の絵図が見つかります。地租改正が明治6年にあり、その時に全国一斉に絵図を作ったのですが、佐賀は遅れました。何故かという、佐賀の乱があったからです。さらに明治9年には佐賀県という名称が消えて長崎県になってしまいます。それで佐賀は検地が遅れて明治9年に作るのですが、

何故か古枝のは明治 18 年となっています。なぜ明治 18 年なのか、また、この絵図をなぜ浜の人が持っていたのか。そして、この絵図は古枝乙だから、祐徳神社より上の方です。だから古枝甲という絵図があるはずなのですが、それはまだ見つかっておりません。



『藤津郡古枝村乙絵図』明治 18 年

今回初公開のこの絵図は5m×4mあります。大きいです。これが地租改正の時の基礎資料になっています。今の地図と違うところは、ちょうどこの時の絵図というのが、江戸時代からの絵図と近代的な地図の過渡期となっていて、色がついている点です。今の地図には色なんかついていないのですが、昔はちゃんと江戸時代の絵図の形式を採っていますから色がついている。ただ、600分の1の縮尺となつてはいますが、あまり正確ではありません。番地は、今の番地とぴったり合っています。だから、明治 18 年から番地は変わっていない。字名も、もちろん変わっていない。明治 9 年のものは全部鹿島市の重要文化財として一括で登録しました。明治 9 年のものと一緒にはずなのに、なぜ古枝だけ明治 18 年なのか。9 年後に作ったのか。なおかつ、なぜ浜の人が持っていたのか。理由がわかたら重要文化財になると思います。すると、こんなふうに体育館では絶対広げられないですから、今日は皆さん、許す限り近づいて見ていただきたいと思います。

それでは、私の歴史の話はこれでおしまいです。